

障害学生支援に関する授業担当教員アンケート (平成30年度)

1. 実施の目的

今後の障害学生支援の充実や方向性を検討するため、障害のある学生が受講する授業の担当教員へアンケート調査を実施し、障害学生支援センターで提供している合理的配慮や取り組みの有効性について検討した。

2. 方法

平成30年度前期・後期において本学で開講された授業のうち、障害学生が受講した授業の担当教員104名(常勤71名、非常勤33名)を対象に、平成31年1~2月にかけて、郵送法によるアンケート調査を実施した。そのうち、50名から回答を得た(回収率48.1%)。なお、回答者は常勤教員27名(38.0%)、非常勤講師23名(69.7%)であった。

3. 結果および概要

各質問項目の結果は以下の通りである。

問① 担当した授業(障害のある学生が受講した授業)について

担当した授業における障害のある学生の障害種(複数回答)を尋ねたところ、視覚障害44件(38.9%)、聴覚障害21件(18.6%)、肢体不自由1件(0.9%)、病弱・身体虚弱5件(4.4%)、発達障害28件(24.8%)、精神障害8件(7.1%)、不明6件(5.3%)であった。(図4-1)。

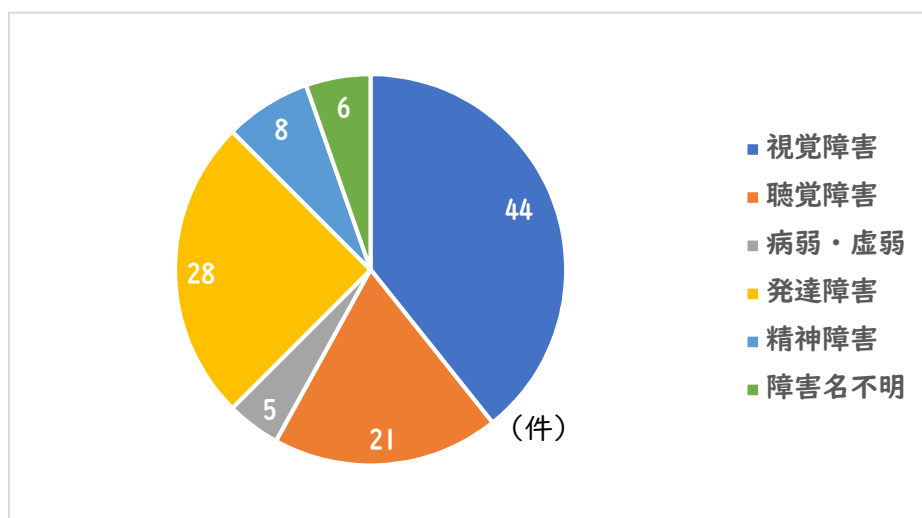


図4-1 支援件数

授業を担当している障害学生へ行った配慮について、選択するように求めた結果を図4-2～図4-5に示す。

視覚障害学生への配慮として「教材の拡大（17件）」が最も多く、「時間延長・別室受験（5件）」、「その他（5件）」が続いた（図4-2）。

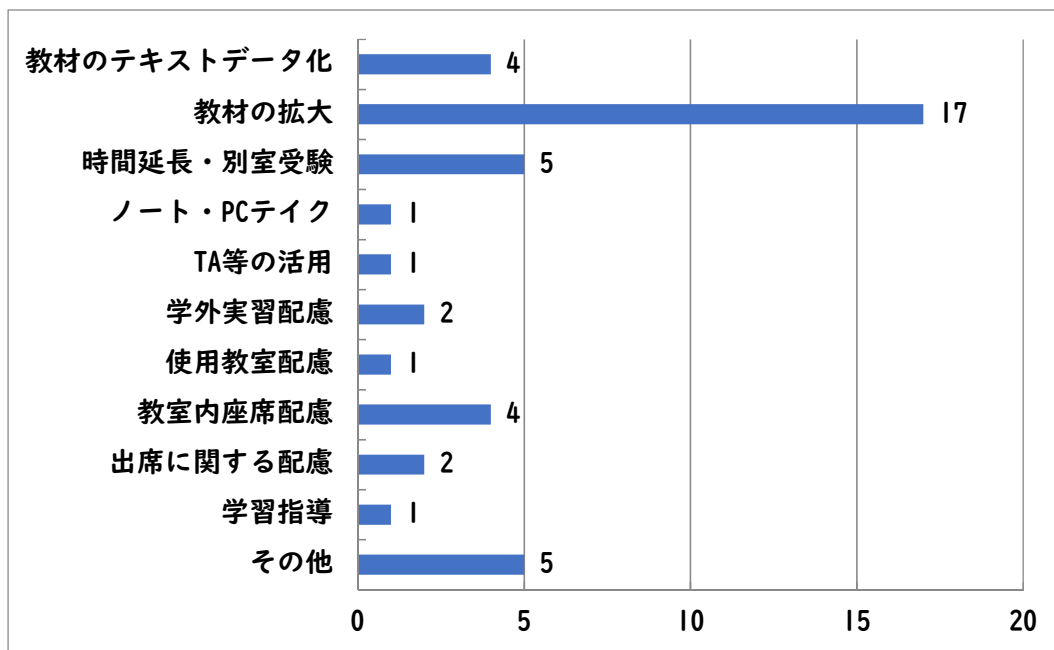


図4-2 視覚障害学生に行った配慮

聴覚障害学生への配慮では、「ノート・PCテイク（7件）」が最も多く、続いて「FM補聴器/マイク使用（4件）」であった（図4-3）。

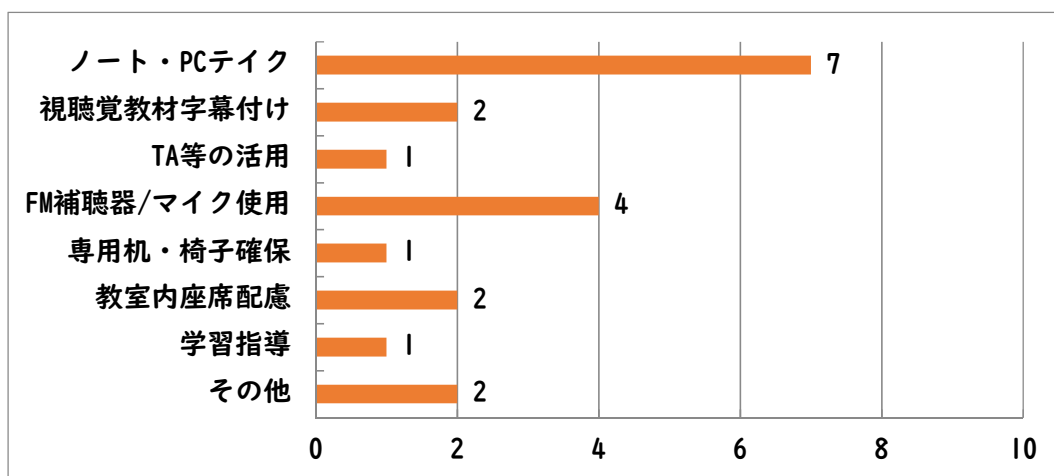


図4-3 聴覚障害学生に行った配慮

発達障害学生への配慮として「教材の拡大(13件)」が最も多く、次いで「その他(4件)」であった(図4-4)。

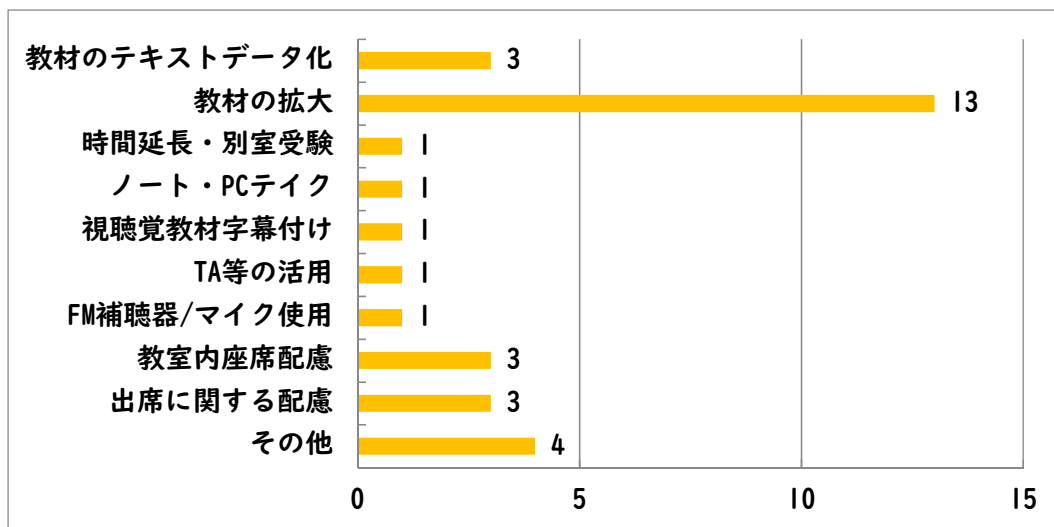


図4-4 発達障害学生に行った配慮

病弱・身体虚弱、精神障害および障害名が分からないと回答した学生に対する配慮を図4-5に示す。

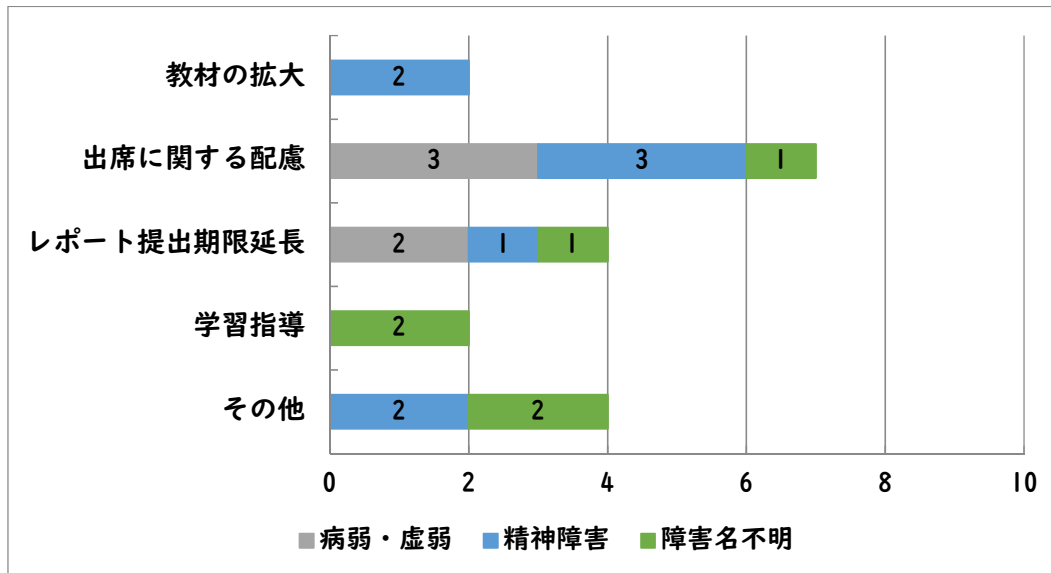


図4-5 それ以外の障害種の学生行った配慮

なお、すべての障害種における配慮の中で、「教材の拡大」が本学において最も件数が多かった。昨年度と比較すると、「ノート・PCテイク」の件数が減り、「出席に関する配慮」が増えた。

問② 障害学生支援センターが提供している支援（パソコンテイク、字幕挿入、情報提供等）は適切であったと思いますか。

上記について尋ねたところ、図4-6のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」という回答が27名、「少しそう思う」という回答が10名と、障害学生支援センターで行っている配慮に一定の評価が得られたと考えられる。その一方で、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」という回答もあったことから、授業担当教員との連絡を密に取りながら配慮を行う必要があると考えられる。

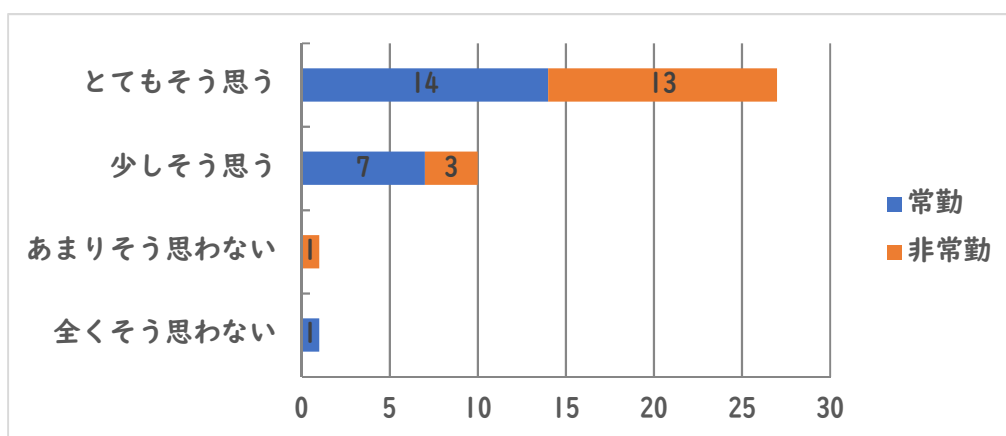


図4-6 障害学生支援センターが提供した支援は適切だったと思うか

問③ 障害のある学生への配慮は、授業の達成目標という観点から見て十分だと思いますか。

上記について尋ねたところ、図4-7のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」という回答が18名と最も多く、次いで「少しそう思う」という回答が17名であった。これらの結果から、障害学生支援センターで提供する配慮は、授業の目標を達成するために十分なものであったと考えられる。その一方で、自由記述からは限られた時間の中で配慮することの難しさを感じるという意見もみられた。

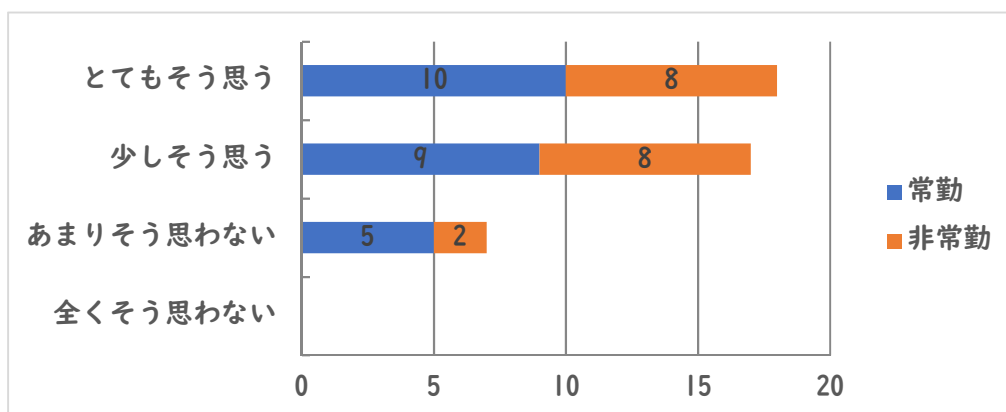


図4-7 障害学生への支援は授業の達成目標という観点から見て十分だと思うか

問④ 障害のある学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思いますか。

上記について尋ねたところ、図4-8のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が10名、「少しそう思う」が20名であった一方、「あまりそう思わない」と回答した人数は10名、「全くそう思わない」と回答した人数は2名であった。

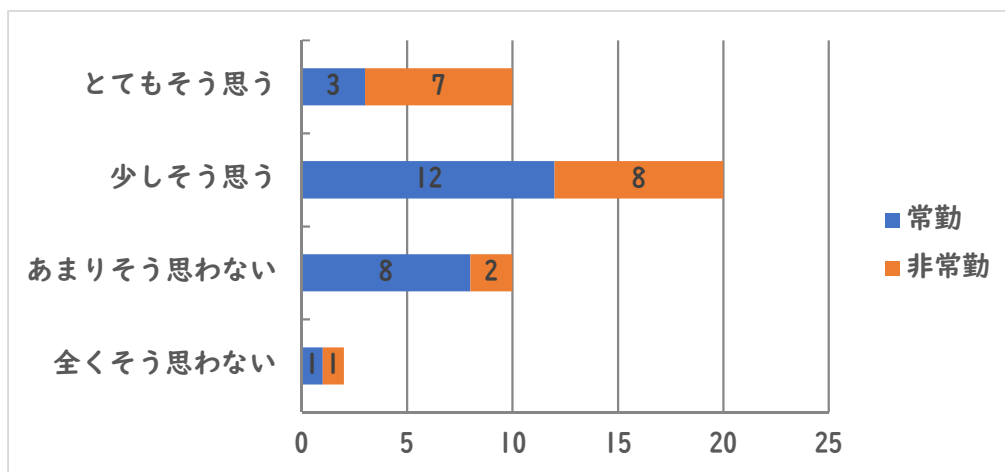


図4-8 障害学生に授業を行うことで、授業のユニバーサル化が進んだと思うか

問⑤ 障害のある学生へ授業を行っていくうえでFDが必要だと思いますか。

上記について尋ねたところ、図4-9のような結果が得られた。回答者全体では、「とてもそう思う」が17名、「少しそう思う」が19名であった。昨年度もFDの実施に対する要望が多かったこともあり、今年度教職員向けに研修会を実施したものの依然として高いニーズがあることが明らかとなった。

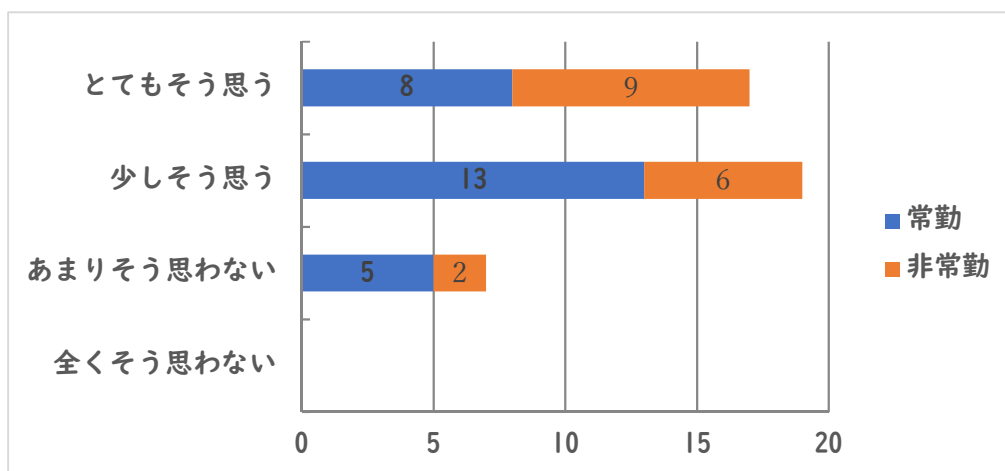


図4-9 障害学生に授業を行ううえで、FDが必要だと思うか

問⑥ 障害のある学生への支援を行うにあたってうまくいかなかった授業はありますか。

上記について尋ねたところ、図4-10のような結果が得られた。回答者全体でみると「毎回あった」が0名、「しばしばあった」が5名、「たまにあった」が18名、「全くなかった」が20名であった。授業を行うにあたってうまくいかないことがほとんどなかったと考えている授業担当教員がいる一方、うまくいかなかったと感じている教員も一定数存在した。このことから、障害学生支援センターと授業担当教員が密に連携を取りながら、配慮内容を検討していく必要性が示唆された。

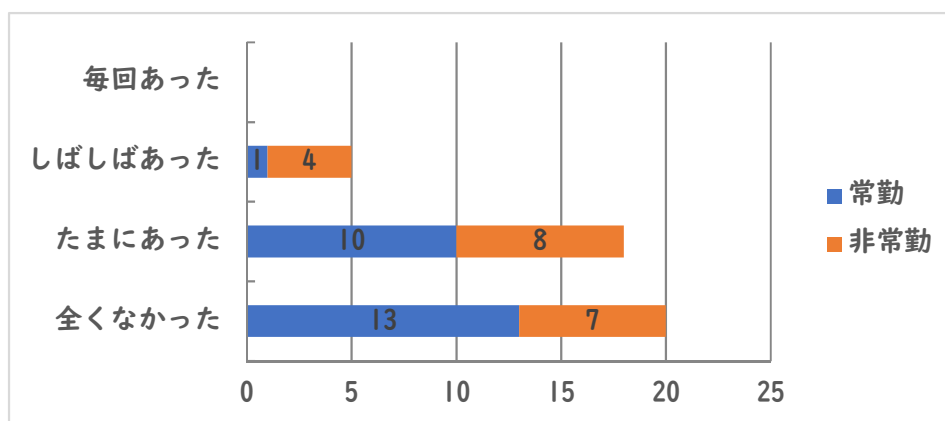
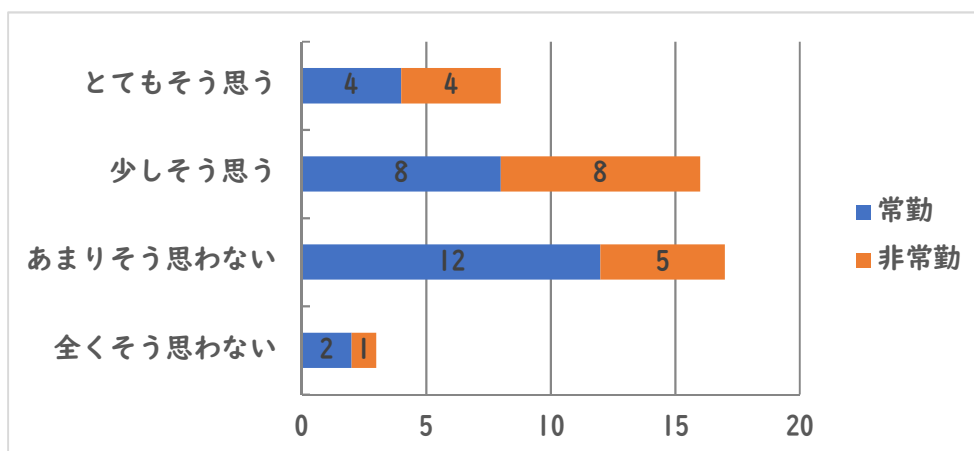


図4-10 障害学生の支援を行うにあたって、うまくいかなかった授業があったか

問⑦ 障害のある学生が自分の必要な配慮事項について、能動的に先生方に伝えたいと思いますか。

上記の問いに対して、図4-11のような結果が得られた。「とてもそう思う」が8名、「少しそう思う」が16名、「あまりそう思わない」が17名、「全くそう思わない」が3名であった。昨年度より、学生に対して授業の初回到配慮依頼文書を説明するよう指導を行っているものの、「あまりそう思わない」という回答が最も多く、意思表示のための支援の必要性が示唆された。



問4-11 障害学生が自分に必要な配慮事項を能動的に伝えていたか

問⑧ 障害学生支援センターより送付した、障害のある学生への配慮依頼文書は十分に理解されましたか。

上記について尋ねたところ、図4-12のような結果が得られた。「とてもそう思う」と回答した教員が21名、「少しそう思う」が20名であり、配慮依頼文書はおおむね理解されていた。しかし「あまりそう思わない(4名)」という回答も認められて、障害学生支援センターで発行しているミニガイドを参照していただくなど、文書による配慮依頼だけでなく、必要に応じて追加の説明を行う必要があると考えられる。

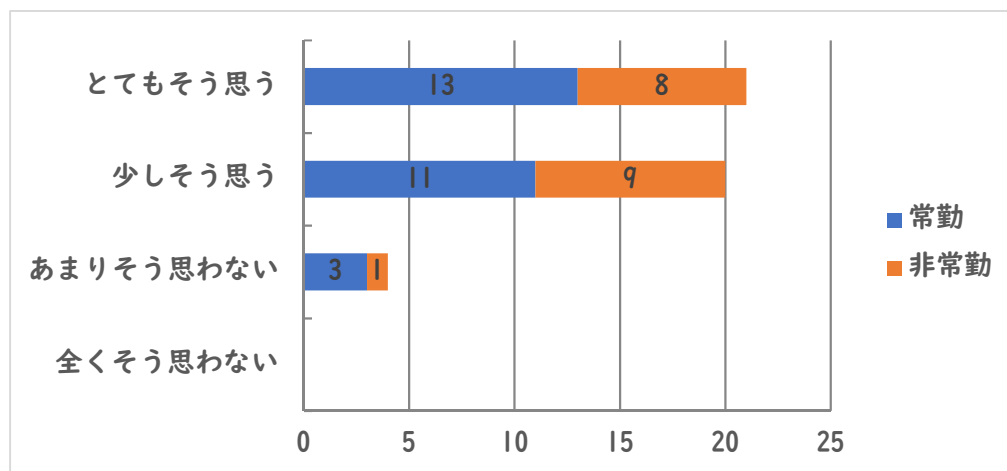


図4-12 配慮依頼文書は十分に理解できたか

本アンケート調査の結果をふまえて、支援方法に関する相談窓口を明確化するなど、授業担当教員と密な連携を図っていきたいと考える。また、授業担当教員に対して合理的配慮の内容を本人が説明するなど、意思表示のための支援も行っていく必要があると考えられる。さらに、聴覚障害の学生が今年度で卒業することもあり、PC テイクのスキルを次世代につなぐ取り組みなどが求められる。